

グローバリゼーションの文脈における中国系移民文学の “Emasculation/Domestication”表象

— *The Woman Warrior* をめぐる「外枠／内枠」物語 —

和 泉 邦 子

The Woman Warrior (邦訳、『チャイナタウンの女武者』以下、『女武者』)において、Kingstonは、“The female I”は、中国文化における“slave”と交換可能な言葉であるとレトリカルな言及をし、最初の章[No Name Woman]におけるショッキングな叔母の話とも相俟って、キングストンが用いた「女」＝「奴隷」というアナロジーは、1970年代の多くの女性読者に認識されやすい「普遍的」イメージを提供することとなった。しかし、同時に、「女」＝「奴隷」のアナロジーは、中国系アメリカ女性の社会抑圧における人種的要素が、いかに、中国系アメリカ男性の抑圧と複雑に絡み合っているかということに覆い隠すことにも貢献した。¹ 家父長制の下での女の従属の普遍性という物語化を構築しようとした第二波フェミニズムは、多様な文化の違いを超えた女性の犠牲化の格好例をキングストンの作品に見出し、手放しで礼讃した。しかし、『女武者』をめぐる渾沌とした批評史をケースブックの形で編纂したSau-Ling Cynthia Wongは、そのイントロで、西欧アカデミズムのジェンダー理論(特に、フランス・フェミニストと精神分析理論)をアメリカ・エスニック・マイノリティへと無批判に適応させることは、可能性と同時に重大な限界を孕むと警告している。²

しかし、このことは、「女」の抑圧がなくなったことを意味するわけではない。グローバリゼーションの文脈において、「第三世界の女」の貧困とその身体への暴力がより深刻な問題として露呈し続けていることを、私たちは知っている。このことは、特に、ミースやヴェールホルらの「開発」概念批判を含んだ第三世界フェミニズムの統計的分析によって例証されるであろう。³ [No Name Woman]における叔母の話に象徴される問題は、「女」の Kategorie を「普遍」であるかのように扱うのではなく、家父長制資本主義が、「本源的蓄積」を増やそうとする欲望を国境を超えて発揮しようとするグローバルな展開において、「第一世界の女」と「第三世界の女」が両極に分断されて異なるコントロールを受けるようになるコンテクストに置き直して再考されるべきなのではないか? 「女」というカテゴリーの分断は、移民というディアスポラ体験を描いている『女武者』において、エスニック化の作用を受ける第一世代の母と第二世代の娘の物語に、緊密で(親密な母娘関係であるからこそ)深刻な両義的亀裂として矛盾に満ちた言説化を生み出している。キングストンが用いた「女」＝「奴隷」というアナロジーは、中国文化における家父長制とアメリカにおけるブルジョア核家族の標準化言説の両方の文化の接合点として、矛盾を一身に引き

受けさせられた移民の母 **Brave Orchid** への賞賛と拒絶を交互に表出させた娘の語りの(母的価値への) 両義的反能を映し出している。娘の語りにおいて、「女」=「奴隷」というアナロジーで表象された「移民の母の身体」に生まれたものは、マイノリティ集団のアメリカ化物語を必然的に内包している。

とかく、ミクロレベルに還元されがちな母と娘の物語の亀裂は、近代とともに始まったグローバリゼーションの過程が欧米による世界の植民地化というマクロレベルでのセクシズムとレイシズムに基づく差異化と差別化を画する過程でもあったことの中国系移民の集合記憶を反映するものとして読み直さなければならないのではないか。母から娘へどのような価値を継承するのか/しないのかという内枠物語は、エスニシティ集団内部のドメスティック・イデオロギーとして、拘束力を発揮し続けているのに対し、その外枠には、もちろん、北アメリカに移民として参入されていく(中国の)父の物語がある。この外枠に位置する中国の男たちの物語は、彼等のエスニシティ体験をジェンダー/セクシュアリティ・カテゴリーへと屈折転嫁させた自己表象(= **Emasculation of Asian Men** という比喩)に結晶化されてきた。これらの内枠/外枠物語は、「普遍国家」を標榜するアメリカ化言説へと包摂されていく過程において、その矛盾を移民の母の身体へと棄却させ、母と娘の物語に断層を走らせながら、アメリカ化を普遍的ヒューマンイズムの体現の場として形成し続けている。

母について語る娘の自分探しの声に反映されている深い亀裂は、単にミクロレベルの問題の矛盾を示しているのではない。ミクロレベルにおける家族関係、血縁関係、世帯の物語は、ループ状に同延上に重ねられ、マクロレベルでの近代国家の円環構造へと接合されてきた。このミクロ-マクロのループ状の円環構造を一貫して立ち上げているのは、ドメスティック・イデオロギーである。近代国家における「市民の女性化」「女性の市民化」物語は、家父長制資本主義に基づく「世界システム」が女性の包摂と排除をグローバルに展開していく段階において、大きく第一世界の消費者に位置付けられる主婦層と第三世界の超搾取にあう生産者としての女への分断を再編していくための下支えとなった。グローバリゼーションは、近代国家の境界を超える現象でありながら、「女」のコントロールとしてのジェンダーは、その国家の「内」と「外」へとジェンダーの意味を振り分けながら、女を両極に分断させるにもかかわらず(あるいは分断させるからこそ)、第三世界の女の搾取、超搾取の力を発動させていくイデオロギー的道具であり続けている。

2001年、9.11以降、グローバルなスケールにおいて、アメリカ側の人権と民主主義の名の下に、戦争を行使する大義がまかり通っている逼迫した現実世界を生きている私たちに問われているのは、ミクロのアイデンティフィケーション表象レベルとマクロのグローバリゼーションの文脈におけるポリティカル・エコノミーにおいて、いかにジェンダー化物語が作動し続けているのか、そのシステムを解明することであろう。ナショナルなレベルでのアメリカ性、あるいはアメリカのナショナル・アイデンティティという表象は、い

かに貧困と暴力が女の身体性において行使され続ける道具へと変換されるのか？「他者性」の意味は、いかに家庭／国内の双方の「ドメスティック」という領域において機能し続け、グローバルな文脈で力を持つものが、より力を集積させていくコントロールの道具となり続けているのか。⁴

本稿では、中国系アメリカ人のエスニック体験に孕まれるものとして、パーソナルな記憶であるかのように語られている母の talk-story が、いかに娘の自分探し物語に亀裂の声を表出させるのか、その「外枠」と「内枠」の相互交渉としてのジェンダー化物語を考察し、「アメリカ化」物語の問題検討の一助としたい。(1) <Emasculation of Asian Men—アジア(系)男性のエスニック体験としての外枠物語> (2) <「エスニック集団内部」と「アメリカ化」の双方の文化に作用する Domestication の過程—内枠物語> (3) 二重の語りのジェスチャーとしての“Cutting the Mother Tongue”—(拘束か解放か) (4) <Ts'ai Yen 像における女の身体性／再生産の意味付けの修正—オールターナティブへの模索地図>

(1) <Emasculation of Asian Men—アジア(系)男性のエスニック体験としての外枠物語>

King-Kok Cheung は、Frank Chin や Jeffery Paul Chan ら *Aiiieeeee!* (1974) 及び、*Big Aiiieeeee!* の編者たちが、北アメリカにおけるアジア系アメリカ男性の歴史体験を 'effeminate' や 'emasculation' という比喻表現を用いて自己表象した経緯を説明している。⁵ 'emasculation' とは、覇権文化によって中国系男性が被った法的屈辱と経済的格下げという仕打ちに対する屈折した自己表象である。中国系男性移民労働者は、奴隷制に対する批判がアメリカ内外で高まっていた 19 世紀半ばに、黒人たちに代わる安価な労働力としてプランテーション労働や鉄道建設労働のために利用されたが、鉄道建設の任務が終了する時期と相俟って勃発した中国人排斥運動に曝されていく。北アメリカの「発展」に中国系労働者がどれだけ重要な役割を果たしたかという現実には、歴史から忘却され、覇権文化によって貼られたレッテル(=おとなしく従順なモデル・マイノリティというステレオタイプ化された役割)を演じることを長い間、強いられたのである。仕事の機会が激減し、女性もいないバッチェラー社会がいびつに形成されたチャイナタウンで、男たちは、自らの意志に反して、ウェイトレス・洗濯屋・召使い・料理人といった伝統的に「女の仕事」とされている役割に格下げされる。あまりに低く、卑しいので中国系男性しかしない仕事は、キングストンの『アメリカの中国人』における Tang Ao の話では「生理の血の汚れを洗う」ことと連想づけられている。⁶

'powerlessness' と 'humiliation' に満ちた中国系男性の「アメリカ化物語」は、中国の父の心情を慮ったキングストンによって、「アメリカン・ドリーム」の誘惑により「女性的」位置に貶められていく父の物語として、その 'emasculation' 表象が結晶化されることにな

る。エンジェル島で「女の足」に踏みつけられるという身体的虐待のフィギュアは、エスニシティ／ジェンダー／セクシュアリティが中国の父の表象において、複雑に絡み合っていることを示唆している。法的レベルでの「市民権」からの「排除」という中国系男性の近代体験は、ネーションの境界を超えて、アメリカ大陸の巨大な台所の「主婦／洗濯人／使用人」にグローバルに再配置されるポリティカル・エコノミー体験と重ねあわされて表象されているのであるが、その体験を‘emasculatation’と表象することは、どのような問題点を孕むことになるのであろう。

Jinqi Ling は、“Identity Crisis and Gender Politics,”において、‘emasculatation’というトロープを用いての男性表象が内包する含意について、次のような指摘をした。⁷

(1) The “emasculatation” of the Asian American—アメリカにおいて、アジア系の男が受けた（人種差別の）屈辱に対する怒りの（ジェンダー的）メタファー表現である。

(2) この語は、女が劣等の社会的存在であること、ゆえに「女のようになること」への恐れと拒絶を必然的に含意している。

(3) この語を使い続けると、家父長的偏見と共謀関係となり、女をさらに周縁化することになる。

(4) この語を言語学的、哲学的にのみ解釈し、特定の社会的政治的コンテクストに照らし合わせることを怠るとき、この語の欠点が如実に露呈される。

(5) 「The “emasculatation”という比喩化された歴史とその構成要素」と「‘masculine essence’」の関係を明確にし、トロープは、それが喚起するイメージという観点からだけでなく、その構築の物質的条件という観点からも調査しなければならない。

さらに、King-Kok Cheung は、中国系男性の男性表象と中国系女性のアイデンティフィケーション場面の問題点を、つぎのように指摘した。⁸ 中国系男性が‘emasculatation’と自己表象することによって、レイシズム(a)とセクシズム(b)の関係が、(a)を(b)に転嫁させて表象され、その(a)か(b)かという二項のどちらかに還元されがちであること。(a)か(b)かという二項対立に還元された表現を取ることで、中国系女性において経験される(a)も(b)もという二重の被差別の現実が見えなくなりがちであること。

Kingston の言う“The female I”が、中国文化における“slave”と交換可能な言葉であるとの「アナロジー」を用いた表現は、中国系女性がレイシズムとセクシズムの両方を被ってきた歴史体験を内面化させたものである。とすれば、アジア系アメリカ女性作家のフェミニズムの声を模索する声は、「レイシズムかセクシズムか」ではなく、「レイシズムとセクシズム」の両方からの解放でなければならない。しかし、「アジア系アメリカ文学」が、モデル・マイノリティとしての主流文化側からのステレオタイプ化の眼差しを破って、産声をあげようとした、1970年代から80年代にかけての正にその時期において、主流文化から周辺化された中国系男性のエスニック体験は、emasculatation との自己表象において、ジェンダー／セクシュアリティ・カテゴリーへと転嫁させて、人種差別による被抑圧感が

表現されることになる。⁹

家父長制資本主義を原理とする近代システムは、複数のカテゴリーを配置して差別構造を作り出してきた。ゆえに、近代によって孕まれた複数の差別構造からの解放主体モデルは、差別化のための複数のカテゴリーが交差する場で、それぞれのカテゴリーが分離可能であるかのように扱ったり、転嫁しあったりすることによっては達成されない。『女武者』が、白人フェミニストによって「女」のカテゴリーを専有する解釈を誘ったり、フランク・チンらの反発によって「ジェンダー論争」を巻き起こしたその受容の批評史をめぐる様々な専有関係のもつれをほぐすには、バトラーの言葉を借りれば、アイデンティフィケーションとは、複数のカテゴリーが、「達成され得ない要求が、お互いの中に／を通して、一点に集まった複数のシニフィアンを再加工しようとしているような交差点」¹⁰のようなものとして捉え返さなければならないことを教えている。分離可能であるかのように見せている複数のカテゴリーは、実は二項に整理された言説化の互いの発話の条件となっているものである。元来、エスニシティというカテゴリーも、アメリカという国の内部に白人と非白人を二項対立的に配置し、内的植民地を構造化していくイデオロギー的道具であり、‘*emasculation*’という中国系男性の自己表象において内面化された差別構造は、さらに、もう一つの階層秩序を構造化するカテゴリーであるジェンダーを用いることによって、女性への差別も本質化して、二重の差別構造を中国系というエスニック集団内部に閉じ込めてしまうことになる。

ミクロのアイデンティティ表象レベルで生ずるこの問題点を、グローバリゼーションの文脈に置き直し、その構築の物質的条件という観点から生じている現象と照らし合わせてみよう。マクロのレベルで生じている現象の分析に有効な視座を提供しているのは、世界中の女性を扶養される主婦と定義する政策 (*housewifization international*) を「世界システム」の構築の中心概念として説明した Maria Mies の『国際分業と女性—進行する主婦化』である。¹¹

北アメリカにおいて、アジア系男性の自己表象となる‘*emasculation*’体験とは、資本主義経済がグローバルなスケールで展開されていく新たなコンテクストの中で、ジェンダーが、西欧の非西欧（の男と女の両方の）支配の道具として再利用されていく際に作用する力関係が、被抑圧体験として心理レベルへと屈折されたものに他ならない。中国系男性の‘*emasculation*’体験は、ミースの言う主婦化のプロセス（つまりジェンダー概念をエスニシティ・カテゴリーへと転嫁させて、非本質的に適応することによって格下げを被った中国系男性の「女性化」プロセス）であり、すべての女性（と植民地の男性）を資本蓄積プロセスに統合するための国際資本の主要戦略へと（内的）植民地化されていった中国系男性の歴史体験である。この国際資本のグローバルな展開において、「公的／私的」にジェンダーを再配置することで、女性（と植民地の男性）労働力を安価なものへ格下げしていく「世界システム」が構築されていった。アメリカ国家によるエスニック・カテゴリーの利用は、

アメリカ国家が内部にエスニック集団を抱え込むことで、安価な労働力を確保し、グローバルなレベルで国際競争に打ち勝つ「強いアメリカ」を形成していく「力」となった。しかし、同時に、アメリカは、文明の衝突の危機（アメリカ統一国家の危機）という反動言説を形成することになるマルチカルチャリズムの問題を国内に抱え込むことになる。60年代に起こった公民権運動、第二波フェミニズム運動に触発されたマイノリティの市民権を求める運動とその文学的独立運動は、自由と民主主義を標榜する普遍国家アメリカが、内に抱え込んできたレイシズムとセクシズムの矛盾が噴出したものと言えよう。

しかし、アメリカ国家が、内に抱えた矛盾は解消されたのであろうか？1970年代にかけて始まった欧米「先進国」を中心とした第二波フェミニズムとグローバリゼーションの同時代性がしばしば指摘されてきており、その同時代性の意味合いは、第三世界の女からの欧米フェミニズム批判もあり、「女」というカテゴリーを一様に扱うことの誤りとして新たな分析を促すことになった。¹² グローバルなスケールで、第一世界と第三世界の「女」を両極化して、異なるコントロールをしていく再編が展開していたからで、この時期に、アメリカ国内（ドメスティックな領域）における女やマイノリティの市民権とその平等の実現は、どこかの誰かの不平等と引き換えになされていたことになる。

ミースたちの言う「女性」概念は、生物学的ないし本質主義的定義ではなく、社会的構築物であって、女性の労働の価値引き下げが起ころうとするところでは、あるいは「女性」としてジェンダー化された社会的存在が存在するところでは、格下げの事態を分析するのに有効な概念でありつづけるという。とすれば、中国系男性の‘emasculation’体験が、「女性的位置」への格下げとして、ジェンダー表象を取ることの含意とは、中国系男性の労働力を格下げして搾取していくマクロな構造に作用し続けている「理念」が、まさしく「女性化＝主婦化」だからであり、そのマクロ構造が、ミクロな表象レベルに屈折して投影されていると言えよう。ここで、「女性」概念のグローバルなレベルでの展開は、女と植民地の両者を格下げしていくイデオロギー概念であり、このとき、「植民地の女」は、二重の差別を受ける。このことは、第三世界の女たちへの経済的なグローバルなレベルでの「超搾取」が生ずることを裏付けるものである。「女」というカテゴリーは、表象レベルで、第一世界の女の発話の権利が、第三世界の女の沈黙を強いることを引き換えに達成されること。

「エスニシティ」というカテゴリーにおいては、それぞれのエスニック集団の男性の発話の権利が優先されていく現象とパラレルな関係を形成する。スピヴァックが『サバルタンは語れるか』で提示した表象システム自体に孕まれる代表表象の問題とも重なったディレンマは、¹³ グローバルなレベルで女と女性化される植民地の男の搾取を「世界システム」として実体化し、物質化していく再編の中で、ミクロとマクロの構造の捩じれた関係性を反映していたはずである。このとき、表象のミクロレベルにおいて生ずるカテゴリー転嫁などの「自己誤認」は、マクロレベルで、グローバルに展開されているシステムティックなコントロール力との関係を見えにくくする一因となろう。エスニシティというカテゴリ

一の内面化は、階層秩序を本質化するために、意図的でなくても差別構造を反復し、共犯関係となってしまう。階層秩序を本質化していくようなアイデンティティを反復的に生産することで、システムに貢献することになるからである。

そのことは、同時に、公民権運動、第二波フェミニズム運動、マイノリティ運動の嵐が吹き荒れた60年代に、バークレーで学生時代を送った中国系アメリカ女性作家としてのキングストンの自己表象とその受容を複雑なものにした。グローバリゼーションの世界システムとしての展開とは、中国系エスニック集団の法的、経済的権利がアメリカ国内において、実現されていくアメリカ化の過程において、自らは第一世界の一員となること（包摂）と引き換えに、排除は、外部へと投射されていくことを意味する。マクロレベルでのドメスティックの意味の転換は、移民の第一世代の母と第二世代の娘の間で、深い断絶として体験されているのではあるまいか。（このことは、内枠物語として、後に詳述する。）

（2）＜「エスニック集団内部」の「アメリカ化物語」に作用する Domestication の過程＞

Lee Quinby は、“The Subject of Memories: The Woman Warrior’s Technology of Ideographic Selfhood,” において、家父長制の二つの権力テクノロジーを「婚姻装置」と「性的欲望の装置」とするフーコーの分析を用いて説明し、強制のメカニズムとしての「婚姻装置」は、『女武者』において、中国の伝統遺産と覇権的アメリカ文化の「性的欲望の装置」（アメリカ核家族制度）へと接合されていると分析した。¹⁴

中国（系）移民がディアスポラ体験を経る中で、太平洋を隔てても「中国文化」から「アメリカ文化」へと、接合されていくことになる「家父長制」は、どのように表象されるのであろう。村人たちの襲撃のあと、じぶんを保護してくれる家もコミュニティも失った叔母は、じぶんの土地でなくなった大地にからだを押し付け、分娩のときを迎える。この場面で、興味深いことに、ジェンダー表象は、「白人フェミニストの閉所恐怖症」から[No Name Woman]における「広場恐怖症」へと変換されている。

額と膝が地面に押しつけられて、からだが痙攣した、と思うと、やがて彼女は仰向けになっていた。...彼女の内に**広場恐怖症**がわきおこり、それがどんどん激しさをますのだった。きっと、がまんできないことだろう。恐怖はとどまることを知らないだろう。(24)

With forehead and knees against the earth, her body convulsed and then relaxed. She turned on her back, lay on the ground...An **agoraphobia** rose in her, speeding higher and higher, bigger and bigger; she would not be able to contain it; there would no end to fear. (14)

『屋根裏の狂女』以来、白人フェミニストにとって、「屋根裏」の比喻は、女が主婦と

して家庭領域に閉じ込められることへのジェンダー抑圧表象として、重要な分析メタファーであった。家父長制資本主義は、家庭／世帯を女の領域とするドメスティック・イデオロギーを行使し続けることで、政治的、経済的資源へのアクセスの道を女から制限してきたからである。しかし、この「屋根裏」は、『女武者』の[No Name Woman]の章において、白人フェミニストによって「閉所恐怖症」として表象されてきたドメスティックな領域への比喩を、「広場恐怖症」へと劇的に根本的に変容させている。

叔母は太平洋を渡ったことはなく、キングストン自身も、『女武者』を執筆した時点で、海を渡って現実の中国を見たことがない。とすれば、豚小屋で出産した叔母が囚われていたという「広場恐怖症」は叔母のものではない。むしろ、海を渡って、中国とアメリカの両方の国で「叔母」の話に孕まれる「女」の教訓を娘に語り継ごうとしている母のものであり、その母の語る「叔母の話」¹⁵に伝達されている「恐怖」を子供ながらに内面化させた、娘の心理への投影表現であるということがわかる。中国文化の遺産の継承とアメリカ文化におけるブルジョア核家族制度への接合は、「叔母の話とその記憶」をその反面教師として、「正しい女の身体性／セクシュアリティ」のあり方を継承しようとする「母の語り／身体」とその語りへの娘の両義的語りを通して「行われる／行われぬ」ことになる。

着目されるべきことは、叔母の話を取り巻く言説化に円環構造がループ状に形成されていることである。叔母の話を取り巻く言説に立ち現れる円環構造とは、ナショナルな均一的物語化の欲求あるいは要請なのではあるまいか。

だが、一人の人間が激しい行動に身をゆだねてしまうことが暗黒の穴を、天空を呑みこんでしまう大渦巻を招いた。現実を保持することにおいて相互に依存しあっていた村人たちは、恐怖にかられ、だからわたしの叔母に向かって、彼女が個人として具体的な形で「円さ」をこわしたことを示したのである。未来とは正当なる子孫という形のなかに具象化されるものである。...まるい月餅、まるい戸口、大小順次にしまえる入れ子式のまるい卓子、まる窓や飯碗—これらの魔除けも、家族とは老人や、一家を守ってくれる死者たちに食物を与える息子たちを産み、忠実に家来を継承してゆく完全なものでなければならない、という掟があることをこの一家に警告する力を失ってしまったようである。

But one human being flaring up into violence could open up a black hole, a maelstrom that pulled in the sky. The frightened villagers, who depended on one another to maintain the real, went to my aunt to show her a personal, physical representation of the break she had made in the “roundness.”...The round moon cakes and round doorways, the round tables of graduated sizes that fit one roundness inside another, round windows and rice bowls—these talismans had lost their power to warn this family of law: a family must be whole, faithfully keeping the descent line by having sons to feed the old and the dead, who in turn look after the family. (12-13)

[No Name Woman]の章は、しばしば中国の封建主義的旧弊さの現れとして、ゆえに中国文化の伝統的儒教精神に根付く男尊女卑の本質を突くものとして、「西欧文化＝進歩／中国文化＝遅れ」の二項対立的読みを誘ってきた。しかし、「叔母の話」を取り巻く伝統的文化への意識とは、「近代化」の波に晒される中で、「伝統／近代」がその両軸に沿ってこちら側とあちら側を二項対立的に均質化して表象させていく構図が立ち上がったものと読み替えた方がよい。近代化の流れへのリスポンスは、伝統を守る役割を女に帰するものとして、その伝統内部に女を押し込めようとする。

ジョージ・モッセは、近代化と国民化物語の関係を『ナショナリズムとセクシュアリティ』において、次のように説明した。¹⁶

国民と社会の基礎である男性性の理想化と並行して、女性は時にその軽佻浮薄を非難されたが、同時に道徳の守護者、また、公的かつ私的な秩序の監視者として理想化された。…女性は守護者、保護者、そして母親でなくてはならなかった。…国民的シンボルとしての女性は、国民の連続性と不易性の守護者であり、その市民的価値観（リスペクタビリティ）の権化であった。…家庭への愛着が近代家族の理想的な特徴となった。

「国民の女性化」「女性の国民化」として、しばしば説明される「女を妻として母として国家内部へ包摂」させるプロセスは、旧弊な封建主義の現れではなく、近代国家が女にジェンダー役割を引き受けさせること、ゆえにジェンダー・アイデンティティを女に内面化させること、（このことは、ジェンダーが階層秩序である以上、女自らによる格下げ位置の引き受けを意味する）、「妻として母として」の位置の格下げを条件に「女」に市民としての権利を賦与すること、という女と近代化（の初期）のパラドクシカルな関係性の胚胎を意味し、「女による近代体験物語」なのである。「叔母の物語」の中心に位置づいている「女のセクシュアリティ」とその「再生産」能力の場としての「子宮（とその位置を象徴的に示す「井戸」の場所）」についてのモラルとは、「再生産」を父から息子へと「正しい血統主義に基づいて、名前、財産、家制度を継承していく」ために、女のセクシュアリティを監視する父系血統原理のことである。ゆえに、夫の正統な子供を妊娠する可能性が失われたあとに、別の男との間の非嫡出子を孕む行為、つまり家父長制が規定する「正しいセクシュアリティ」を婚姻によって正当化されたドメスティックな内部に閉じ込めておくこと¹⁷への侵犯行為は、厳しく罰せられる。村人たちの村八分的な暴力的排除の姿勢はセクシュアリティを婚姻内の「正しい位置」に留めておくことへの要請の発露であり、その要請は、北アメリカへ中国系男性が安価な労働力を提供するために移民として渡り、その結果、伝統的家族という絆が破壊されていく外枠物語が＜ジェンダー的対の物語＞として存在するにもかかわらず（あるいは存在するからこそ）作用している。

あるいは、「金山」へと旅立った男たちの物語が外枠にあるからこそ、中国に残された叔

母の話が内枠にあるのであり、北米における極端にいびつな男たちばかりのバッチェラー・コミュニティ形成物語¹⁸と中国に残された女たちに、家族の離散というディアスポラ状況にもかかわらず（であるがゆえに）要請された「再生産」を正統に保持する役割の法外で、一方的な女への要求としての（叔母の話と）母の物語が、円環状に鱗状に折り畳まれて引き継がれているのである。

二人は、娘が一人で伝統を守り続けることを期待した。野蛮人にまざって暮らしている彼女の兄たちは、そうと露見することなく伝統に傷をつけてしまうこともありうるからだ。彼らが帰ってきたときに、そこにそのまま伝統が残っているように、洪水から過去を守りとおす役割が重く深く根を下ろした女たちに与えられていたのである。（16）

They expected her alone to keep the traditional ways, which her brothers, now among the barbarians, could fumble without detection. The heavy, deep-rooted women were to maintain the past against the flood, safe for returning. (8)

ここで、叔母への村人たちの反応と西欧化物語との緊密な二項対立的構図の構築が示唆されている。西欧化の潮流は、中国に伝統を守ること、殊に、その集団の血縁関係を維持し、強化すること、集団の純血さを守ることの必要性を要請する。このとき、集団外部との緊張関係ゆえに、集団内部の女の生殖能力のコントロールを強化して、集団として結束していくことが、伝統を守る女の役割として増々要請されている。

だが、飢えて食欲な男立ち、旱魃の土壤に作物を植えつけることにも飽きた男たちは、食物を買うための金を送るために村を出ていったのだった。亡霊たちが災をもたらし、盗賊が跳梁し、日本との戦争が、洪水との戦いがあった。...よき時代にはおそらくただのあやまちにすぎない姦通も、村が食物を必要としていた時代には犯罪になった。（23）

But the men—hurry, greedy, tired of planting in dry soil—had been forced to leave the village in order to send food-money home. There were ghost plagues, bandit plagues, wars with the Japanese, floods.... Adultery, perhaps only a mistake during good times, became a crime when the village needed food.(13)

貧困にあえぐ村の男達は、「金山の夢」に希望を託し、村を離れてアメリカに移民として渡って行った。食べるものにも事欠く「ホーム」に残された妻や子供たちに、食料や金を送り続けるために。そして、いつか貧困から解放されて妻や子供たちの待つ「ホーム」に帰るために。中国の男たちの近代参入物語は、アメリカ国家によるエスニック化政策に必然的に絡め取られていくのであるが、『女武者』／『アメリカの中国人』に分離して書かれたキングストンの「女／男の物語」は、内枠／外枠の物語を分断した解釈を誘ってきた。

しかし、内枠／外枠の物語は、中国（系）が太平洋を隔てて、家族の離散、再集合を繰り返すなかで、相互に交渉しあっており、どちらか一方だけが独立して存在する物語なのではない。

「金山」へと旅立った男たちの外枠物語と対になって、家父長制のモラルを破った「叔母の物語」があるとするならば、家父長制のモラルを守る「母の話」も別の意味で対の物語である。**Brave Orchid** は、娘の語りにおいて、どのような苦境にも打ち勝つ力のある「勇敢で強い女性」として、最大限の讃辞をもって表象されており、だからこそ、幼い少女時代のキングストーンをその強大さで支配して、押しつぶしてしまう脅威としても、娘によって矛盾して把握されている。しかしながら、「叔母の話」と「母の話」は「悪い妻／良い妻」に両極化するセクシュアリティの制度に拘束されており、母は、家父長制の性モラルを内面化した良い妻を演じ続けた人でもあるという側面を見逃してはならない。だからこそ、夫が留守の間の性的誘惑者のフィギュア―は、繰り返し半人間的な奇妙な‘ape’の表象となって登場する。¹⁹

けれども、夜には、母は足早に歩いた。外に出るのは盗賊と彼女ばかり、産婆のために出てくれる駕籠などはなかった。あるとき、半人半猿の世にも奇怪な生きものが往来に出没したことがあった。…猿人間は手をのぼし、檻に蔭を落としていた薄葉に触れることができた。(109)

But at night my mother walked quickly. She and bandits were the only human beings out, No palanquins available for midwives. For a time the roads were endangered by a fantastic creature, half man and half ape,...The ape-man could reach out and touch the thin leaves that shaded its cage.(84)

家父長制の性モラルを守り通す母は、娘のテキストにおいて、「強い母」として賞賛されている。家父長制の性の制度は、婚姻内のドメスティックな領域外のセクシュアルな誘惑者は、女が打ち勝つべきものであり、誘惑に屈してしまえば、それを一方的に誘惑された女の責任とするものだという性モラルを内包しており、母が内面化したモラルは、娘の語りにおいても、強制的な拘束力をもって把握されている。「叔母の話」は、家父長制の明からさまざまな性のダブル・スタンダードの覆い（ヴェール）が、たまたま剥がされただけであり、いつでも「母の話」にも「娘の話」にもなる潜在性を秘めている。母は、中国においてプロフェッショナルな医者／看護婦であるが、そのような社会的位置にいる女も例外なく、このモラルは作用している。

45歳で太平洋を渡った母の物語は、キングストーンを筆頭に6人の子供をもうけ、アメリカでの核家族が要請する女の責任へと接合されているが、その矛盾体験は、「広場恐怖症」の表現とパラレルに対応している。それは、白人フェミニストがメタファーとして多

用した「屋根裏」という空間的閉域に押し込められることの恐怖に加えて、大海原を超えて、中国系移民のコミュニティを繋ぎ止める結節点としてのジェンダー／セクシュアリティ役割が重ねられていることの矛盾した自己表象なのではあるまいか。

渡しの頭蓋に、蜘蛛の巣状の頭痛が細い枝となって広がる。母は氷のように冷たい骨を腐食して蜘蛛の脚を刻みつける。わたしの頭蓋を、拳をこじあけては、時間に対する責任を、そこに介在する海に対する責任を押し込もうとする。(139)

A spider headache spreads out in fine branches over my skull. She is etching spider legs into the icy bone. She pries open my head and my fists and crams into them responsibility for time, responsibility for intervening oceans. (p. 108)

この場面において、「時空間」についての合理的でない母の説明は、ディアスポラ状況において、近代が母に強いた体験の矛盾が集約されている。外枠物語（エスニシティ）は、中国で医者／看護婦であった母のプロフェッショナルな位置を格下げする。アメリカにおいて、中国系移民は排斥法によって、家族を持つことが長い間禁止され、いびつなバッチェラー社会の形成を強いられてきた。中国系コミュニティへのレイシズムの結果生じた人口の男女比におけるアンバランスという近代参入体験の埋め合わせをするかのように、アメリカに渡ってからの **Brave Orchid** は、子沢山である。中国に残された妻は、夫の留守中に「正しいセクシュアリティ（ドメスティック）」を守る任務を負ったが、海を超えた **Brave Orchid** には、**Ed/Baba's wife** としての伝統的な役割が「子を産み育てること」を含めて復活する。「夫のための料理・洗濯・掃除」及び「次から次ぎに生まれる」6人の子供たちを「養育」する母としての役割は、いわゆるエスニック集団内部の「私的（シャドウ・ワーク）領域」であり、「夫」が偉大なアメリカの「料理人／洗濯屋／掃除夫」として、公的に「女性化（格下げ）」され、安価な労働力として、国家に組み込まれる外枠物語に内部化されたシャドウ・ワーク物語となる。

娘にとって、中国と中国系コミュニティの要請を一身に引き受け、マクロなポリティカルエコノミーのレベルにおいても、結果として、超搾取される役割を負わされている母は、アンビヴァレントな存在である。娘による母の表象は、例えば、[Shaman]の章の書き出しにおいては、若い娘たちに混じって「医者／看護婦」の免許を取得した賢明で向上心に溢れた知識人として最大限の讃辞と尊敬をもって描写されている。[White Tigers]の章において、中国の民話にヒントを得た[Fa Mu Lan]は、中国（系）コミュニティが危機の時に、男に成り代わってコミュニティを守る母の物語である。しかし、[Fa Mu Lan]が、ジェンダーをトランスしても家父長制の枠組みを変えない忠実な下僕であるように、**Brave Orchid** の強さ、勇敢さは、コミュニティが危機であるからこそ、その危機を男に代わって守る役割を果たす力へと変容されている。²⁰ [Fa Mu Lan]において、前の戦争でけ

がをした父に代わって戦場に出かけるトランス・ジェンダーの表象は、金山に旅立った男たちに代わって、ドメスティシティを守る母の表象と平行でもある。現実の戦争ではなく、経済的に逼迫した事態が迫られたという意味での「非常事態」に変更されてはいるが、「非常事態」だからこそドメスティシティを守る女の役割が強調されたという近代へのレスポンス物語と対応している。また、娘による母の両極化された表象とは、単なる心象のミクロレベルの矛盾なのではなく、中国での高位の座と渡米後の最下層の座に、海を渡って分断されることになる母の現実体験を反映したものである。「中国／アメリカ」という国境を跨ぐにもかかわらず（あるいは、跨ぐからこそ生ずる）マクロレベルの双方の文化における搾取構造が、「移民の母の身体」のパーソナルに見える責任へと、幾重にも折り畳まれた矛盾を押しつけていることから生じている。

(3) 二重の語りのジェスチャーとしての“Cutting the Mother Tongue”－（拘束か解放か）

娘の語りにおいて、母と娘の物語に横たわる深い亀裂は、「母が舌を切る／母の舌を切る」という二重のジェスチャーに象徴されており、このディレンマは、『女武者』における「以下は母がわたしに話してくれた話であるが、小さかったころに聞いたものではなく、最近聞いたものだ。わたしも「お話」をする人なのだ」と母にいったら、話してくれたのだ。発端が母の話で、おしまいの方はわたしの話である。(265)“Here is a story my mother told me, not when I was young, but recently, when I told her I also talk story. The beginning is hers, the ending mine.”(206)」という結びにもかかわらず解消されることはない。あるいは、成長期を迎えた娘の発話は、「移民の母に孕まれたもの」を強引に分離することを条件として達成されており、矛盾を矛盾として、それが孕まれる契機を読み手に向けて開示していると言ったほうがよいかもかもしれない。娘は支配者の言語(Master Tongue)を習得することに必然的に内包されるアメリカ化物語を母へのエレジー (the Mother Tongue を切る) として紡がざるを得ない。近代における西欧とアジアの出会いという政治的含蓄、押し寄せる近代化の波に飲まれて経済的貧困化を強いられたアジア (の農村)、その政治的、経済的背景によって無理矢理に引き裂かれた中国(系)コミュニティ。家族の離散というディアスポラ体験にもかかわらず、移民の母に課せられた、ホーム、コミュニティ、そして、故国を繋ぎ止める結節点としての役割は、第二世代の娘に広い海原に曝されるような恐怖心を喚起させる(広場恐怖症)。中国では、プロフェッショナルな「医者／産婆」として「リスペクタブル」な知識人であったはずの父と母を、読み書き能力すら欠いた洗濯女に格下げするアメリカ化物語に内包させるときに作用する「二重の罫」。支配者の言語を習得することは、キングストンにおいて、アメリカ化物語に内包される暴力に曝される危機として把握されている。もしも、「十八か月間の原因不明の病氣(232)“eighteen-month-long mysterious illness”(182)」が、幼児の言語習得期間18ヶ月

を経て、象徴秩序に参入するというラカンの主体形成理論のもじりであるとすれば、キングストンによるラカンの図式の書き替えは、アメリカのナショナル・アイデンティティへの「包摂」物語が、中国（系）マイノリティが体験した排除という歴史記憶にもかかわらず、普遍的ヒューマンイズムの体現の場としてアメリカ化物語へと転換されて、紡ぎ出されていくこと（そのような言説化が内包する暴力）への抵抗感を刻印している。主流が構築した価値観をマイノリティ側に受け入れさせる（強制）あるいは、自ら積極的に受け入れ（内面化）、自らの価値観とすることが最終段階の同化作用であるとすれば、キングストンの子供時代のアメリカ化教育体験は、その同化プロセスへの抵抗感に満ち溢れている。

「わたしの記録を見ると、わたしは幼稚園で落第し、一年生のときは知能指数なし—知能指数ゼロとなっている。...わたしは絵を真黒に塗りつぶしていた。(233)“My record shows that I flunked kindergarten and in first grade I had no IQ—a zero IQ”...which I covered with black. (183) IQ=0 をもらうことになった知能テストへのキングストンの反応とは、アメリカ的な同化の物差しで標準化、普遍化されることへの抵抗感とその物差し自体へ疑念の眼差しを差し挟むジェスチャーである。しかしながら、わずかばかりの抵抗のジェスチャーも、女の身体性を、“total passivity”として扱おうとする性の制度の権力によって「わたしは本で読んだヴィクトリア朝時代の隠遁者のように暮らした(232)“I lived like the Victorian recluses I read about.”(182)」とミステリアスな病気に捕われて寝込む時期を経て、そのアメリカ化プロセスへの抵抗のジェスチャーを、一時的に沈静化させている。アメリカ化の理念の身体性への書き込みは、病理化されヒステリー化される危機として体験されている。この女の身体をヒステリー化させるものへの恐怖は、キングストンにおいて、発話することの暴力として書き込まれているということが特徴的である。「押しつけられた沈黙」を反復する位置を、ずらし、差異を生み出すために、いつも押し黙っている中国語学校の少女を、キングストンは女子トイレの前で追い詰めていく。自らのダブル（沈黙を押し付けられる側）の位置から、「暴力を振う者／振われる者」が逆転していく場面である。

と同時に、娘の語りにおける、「猿“ape”のフィギュア—」<他に、「背を丸めて座り込む大男」hulk, ‘the hunching sitter’, 「ゴリラ」‘that gorilla-ape’, 「化け者」‘freaks’などの完全に人間になりきれていないものの表象(200-201)>は、「エスニシティ／ジェンダー／セクシュアリティ」の絡まった結び目として、振れが隠蔽されて紡がれていく転換点となる。[Shaman]の章で、母をドメスティックな正しいセクシュアリティの「外」へ誘惑しようとする「野蛮」と表象された他者は、中国語学校で、キングストンのあとをストーリーカーのようにつけねらう「フランケンシュタインの怪物」‘Frankenstein’s monster’, ‘this zombie’(195)へと‘disfigured’されている。しかも、キングストンが大嫌いなこのゾンビは、キングストンと自分が似たもの同士のダブルだと思ってつけまわしており、父も母もお似合いのカップルだから、「結婚させて、奴隷にしようとしている」と娘には感じられる。

中国語学校には、おそらくわたしを同類だと思っただことだろう、わたしのあとをつけまわす精神薄弱児の男の子がいた。...びっこを引くのもやめた。母がこの怪物とわたしがちょうどいい取り合わせだと考えるのはまちがいがなかったから。(249-250)

At Chinese school there was a mentally retarded boy who followed me around, probably believing that we were two of a kind....I didn't limp anymore; my parents would only figure that this zombie and I were a match.(194-95)

「いつも押し黙っている少女」と「知能障害の少年」は、それぞれ、キングストンに、そのような位置を反復する恐怖として迫ってくる‘*object-figure*’の少女版／少年版のジェンダー的対イメージであることがわかる。IQ=0 をもらうことになったアメリカ的な同化の物差しで標準化、普遍化されることへの抵抗感は、キングストンが少女の記憶から脱皮し、大人の女の身体性とセクシュアリティへの書き込みが逃れられないプロセスとして認識されるにつれて、暴力的に、一端は、解消のジェスチャーを示していく。「野蛮、狂気、ヒステリー、知能障害 (=他者性) の側」に立たされることの恐怖が、「英語」を学び、ストレート A の成績を取り、大学で奨学金をもらうように努力することの大切さを教えるのである。

『女武者』は、その結末に向かって、このディレンマを、子供時代の母の *talk-story* にまつわる非合理的な幽霊に取りつかれた記憶を振り払い、「進歩」の言説化への参入する (これは、アメリカニゼーションやウエスタナイゼーションと同義と考えられる) という後戻りできない言説化のプロセスとして、一端は、解消する方向に進んでいくジェスチャーを示していく。

「いずれにしても、あたしは家を出ます。出るわよ。わかる？あたしは醜いかもしれない、がさつかかもしれない、でも、一つだけ確かなのは、あたしは薄弱じゃないってことよ。あたしの頭はちゃんとしてるのよ。先生鬼があたしになんといっているか知ってて？あたしは頭がいいから、奨学金がもらえるだろうって。大学に入れるって。もう申請したのよ。あたしは頭がいいのよ。いろいろなことができるのよ。A を取ることもできるし、もしなりたければ科学者でも数学者でもなれるって。...幼稚園に落第したただ一つの原因は、かあさんたちが知能指数ゼロにしたんじゃないの。(257-258)

このとき、母を「中国的なもの=遅れ」と表象することで始めて、娘は「アメリカ的なもの=進歩」の側に立つことができる。その意味で、『女武者』におけるアイデンティティ探しは、苦痛に満ちてはいるが、第二世代の娘が「アメリカ人」になっていくプロセスが書き込まれている。「ジェンダー抑圧」と「エスニシティ抑圧」の二重の差別を受ける中国系女性の自己表象 (「女」=「奴隷」とアナロジーで表現される位置) は、この両方のカテ

ゴリー操作による「奴隷化」から解放されようとする娘の語りにおいて、「奴隷化されるもの」が「(移民の) 母的なもの」へと二項に還元されて、母に怒りをぶつける傾向にある。この傾向は、マクロレベルの幾重にも折り畳まれた超搾取の構造がパーソナルな母娘関係へと投射されているからかもしれない。

元来、母のせりふに頻出する「奴隷」という表象は、「女」への普遍的なジェンダー抑圧を指すのではなく、北アメリカにおけるエスニシティ・カテゴリー操作による中国の男と女の両方の搾取を示しているものである。

「とうさんは日に十二時間も働いて、休日もなかったものね。...ほとんどただ同然で働かされてた。とうさんは奴隷だった、わたしは奴隷だった。」(342)

"He worked twelve hours a day, no holiday,"..."He got paid almost nothing. He was a slave; I was a slave."(CM, 244)

わたしたちは奴隷になり下がってしまった。中国だったら人間以下の、村の奴婢たち同然になったんですよ。わたしは文盲の女の女中になり下がってしまった。...(144)

We've turned into slaves. We're the slaves of these villagers who were nothing when they were in China. I've turned into the servant of a woman who can't read.(CM, 245)

中国においては、「The Female I」は、「女」＝「奴隷」と同じようなものと、アナロジーで表現された女性主体とは、中国の父と母の両者のエスニック体験が内包されており、自らの体験を「奴隷」と繰り返し言及する母（と父や祖父）の声が反響し続けている。このとき、娘の自分探しの物語は、女を「奴隷化」する力から逃れる必要性（ジェンダー）と同時に中国（系）を「奴隷化」しようとする力から逃れる必要性（エスニシティ）に迫られている。

Patricia P. Chu は、ナショナリズムの言説化が、「伝統／近代」をいかにジェンダー化して表象するかという二項対立の法則をつぎのように説明した。²¹

国は、伝統に根ざすものとしても、進歩的な力によって絶え間なく変容されるものとしても、想像されるので、ナショナリズムの物語における時間的乖離は、しばしば、ジェンダー差異として、表象される。女は、(緩慢で、後進的で、自然な) ナショナルな伝統の先祖帰りの的であって真正な身体として、ナショナリズムの保守的な連続性の原理を具現しつつ、表象される。男は、それとは対照的に、ナショナリズムの進歩性や非連続性の革命的原理を具現するものとして、(進取的で、力強く、歴史に残る) ナショナルな近代性の進歩的行為体を表象する。(52-53)

ナショナリズムがジェンダー的二項に整理統合されていく図式は、第一世界の一員としてフェミニズムの声を模索する娘の語りにおいて、「母的なもの＝中国（遅れ）／娘の近代化物語＝アメリカ（進歩）」として、捻れた反復を立ち上げる傾向を示す。「中国の女」として、移民第一世代の「母」が被った「超搾取」は、移民第二世代の娘の自己探究物語において、そのような「超搾取」を強い意志によって生き延びた「母」に最大限の讃辞を送りつつも、自らはそのような位置（を反復せずに）との決別を計ってアメリカ人の一員となる物語（＝「同化」の物語）に変容を強いる力に晒される。

古矢旬は、出自、民族、言語、宗教を異にする多様な移民から、アメリカ市民がつくりだされる過程を普遍国家のアメリカニズムとして説明している。²² アメリカニゼーションとは、アメリカ社会の側における移民の吸収、同化作用を指す一方で、移民自身のアメリカへの適応の努力を指すことばでもあった。

「英語」とアメリカ人としての「基本的な市民道徳」の価値観をうけいれ、みずからをまずアメリカ人として意識する傾向が強まってくる。そのような意味で、「非米的」なものの排除を企画する「移民排斥」と「アメリカ的」な価値意識の注入を主目的とする「アメリカ化」とは、手段を異にしながらも、相互補完的にアメリカン・アイデンティティの形成をうながしてきたのである。(27-28)

しかし、“Cutting the Mother Tongue”という（母からの）解放のジェスチャーを形成する場合は、同時に、「非米的」なものの排除を企画する「移民排斥」に対抗するヘゲモニーを立ち上げる基盤（マトリックス）として、対抗コミュニティを束ねていくための絆を指し示す場でもあることを指摘しておかねばならない。[No Name Woman]に露呈されていた家父長制のモラル（父系血統主義に基づいて、女のセクシュアリティを婚姻内のドメスティックな領域に閉じ込めておくというドメスティック・イデオロギーの行使）を説く母の語りは、記号内容＝シニフィエのレベルでは、そのモラルを再発動しているのであるが、語ってはならない禁止事項を語るという記号表現＝シニフィアン・のジェスチャーによって、記号内容が指し示す命題のずれを指し示し、その関係性を覆す契機をはらむ語りの場へ開くという二重の語りのジェスチャーを示しているのである。ゆえに、「母が舌を切る／母の舌を切る“Cutting the Mother Tongue”」という二重のジェスチャーは、大人の女として、少女時代に別れを告げ、娘から母となっていくプロセスにおいて、自らの身体に性の制度が書き込まれていく拘束性を示すものであると同時に、シニフィアンとシニフィエの間隙のずれをどのように読み説き、自ら演じていこうとするのかという課題を未来の自己と読者に向けて開示してもいる。貞淑な妻という役割は、夫の価値がそのまま妻の価値であり、その妻が母となって、娘にそのモラルを引き継がせる役割を担い続ける限り、女の差異はかき消され、同一性とそのシステムの再生産が世代を超えて伝達されることになる。

しかし、子供の両親に対する忠誠心の印として、[Fa Mu Lan]の背中に刻みこまれた文字は、父への忠誠心と母への忠誠心の間にずれがあることの記号にもなりうる。ちょうど、中国とアメリカという二つの祖国のはざまに生き、国境を超えて生き延びた中国系アメリカ人のアイデンティティ探しにおいて、中国とアメリカの両国への忠誠心を同時に示すことが不可能であるように、叔母の話をすることを禁止する母の声には、夫（父）系のモラルとのずれが、こっそりと忍び込まされていたのである。

近代国家間の覇権争いの波に翻弄され続けた母の物語において、フーコーの言う家父長制の二つの装置（「婚姻装置」と「性欲望の装置」）の強制力は、あまりにも巨大であり、ホーム・エスニック・コミュニティ、そして、中国とアメリカという二重の故国を束ねるドメスティシティへのナショナルな均一化要請は、「女」に、そのような均質化とのわずかな差異、ほんの一瞬のずれも許容しない抑圧的な力を行使する。しかし、同一性の要請が禁止していることを語ることによって、母の語りは、少なくとも、その隘路をくぐり抜けて、差異を生み出す「スペース」を作りだした。母の物語における“Cutting the Mother Tongue”という二重の語りのジェスチャーは、娘にとって長い間、謎であった。しかし、母の語りの二重のジェスチャーは、「語ってはならぬ」と禁止することによって、逆に「語ってはならぬ」ものを生産もしているのであり、変容の可能性を否定して閉じ込めようとする禁止の場に、同時に、その反復強制力を変容させる契機も孕まれていたのである。

(4) <Ts'ai Yen 像における女の身体性／再生産の意味付けの修正－オールドターナティヴへの模索地図>

母と娘の物語に孕まれる矛盾を強引に解消するかのように、『女武者』の最終章には、Ts'ai Yen の民話が配置されている。Ts'ai Yen は、蛮族に連れ去られて囚われの身として過ごした12年のうちに、「砂の上に子供を産み落とし、蛮族の女たちは鞍の上で分娩できる。(267)“She gave birth on the sand; the barbarian women were said to be able to birth in the saddle.”(208)」という伝説を具現した女性像である。この Ts'ai Yen 像は、父系血統主義に基づいて、女のセクシュアリティを婚姻内のドメスティックな領域に閉じ込めておこうとする家父長制の性モラルを、女の立場から修正し、女の産む力に対する意味付け直しを行っている。「男らしさ／女らしさ」イメージを越境し、ジェンダー役割の非対称性をつき崩して、二項対立の図式を脱構築していく対抗イメージである。馬に乗りながら、いとも簡単に出産を済ませてしまう Ts'ai Yen は、妊娠、出産（の潜在的可能性）する身体を本質化することを嫌いつつ、女の産む能力という差異を、二つの文化の中央に再配備された位置から、それぞれの文化に子孫を継承するように均等に再配分している。国境を超えて、両方の文化に子孫を残す Ts'ai Yen 像における女の再生産能力の再配備は、夫以外の男との交わりを禁止することによって、民族の血縁を「純血」に保とうとするヒステリックな旧弊さの構造を瓦解させ、夾雑性、雑多性、混交性、多様性への道を開く。

[Fa Mu Lan]像において、「戦う女性の強さ」は、一つの文化の家父長制システムに奉仕するように回収されてしまいがちであった。しかし、[Fa Mu Lan]像において提示されていた、ジェンダーをトランスする契機は、Ts'ai Yen 像において、ジェンダー・セクシュアリティ・身体性の意味づけを再配備するイメージへと引き継がれていっている。そのプロセスにおいて、母と娘の物語は、母から中国文化を引き継ぎながらも、自らは、アメリカに生まれ、中国系アメリカ人という単一ではないハイフン付きの「アイデンティティ」を背負う娘がトランスし、横断し、交差し、混交していく境界において演じられていく共同作業へと変更されていく。「わたしの頭蓋を、拳をこじあけては、時間に対する責任を、そこに介在する海に対する責任を押し込もうとする」ような「移民の母」への（中国／アメリカの）二つの文化の過剰な要請を嘆く母に、娘は、私たちは国境という恣意的な境界線によって「アイデンティティ」が問題にされることのない「地球市民」だと言う。

あたしたちはいまでは地球に属しているのよ、かあさん。もうあたしたちはある特定の土地に結びついていないことで、地球に属することになる、ということ、かあさんにはわかる？いいこと、あたしたちが立っている場所が、あたしたちのものなるよ。(138)

We belong to the planet now, Mama. Does it make sense to you that if we're no longer attached to one piece of land, we belong to the planet? Wherever we happen to be standing, why, that spot belongs to us as much as any other spot. (107)

伊豫谷は、グローバリゼーションの文脈において、「世界の統合化は、政治的／経済的だけでなく、文化的な欧米の優位として進展しており、人権意識の高まりとは逆に、ホワイトネス（白人性）の男性性を頂点とする秩序が、レイシズムやセクシズムを通して強化されてきた。グローバル化の過程で、欧米を基準とする規範や様式、制度や機構さらに文化は、世界の至る地域に深く浸透し、あらゆる地域の国家は、グローバル化を促すように再編、強化されてきている。(2)」と説明した。

しかし、とすれば、WASP 中心のアメリカ国家の帰化不能のアメリカ人として、内部であると同時に外部であるものとして、矛盾した扱いを受け、周辺化されてきたマイノリティ集団こそが、国家という上から定義との齟齬をきたす「ずれ」を演じる抵抗点にもなりうるはずである。帰化不能のアメリカ人としての位置は、『アメリカの中国人』において、ベトナム戦争に赴く弟の姿の表象にアイロニーを込めて描かれることになる。「敵（彼ら）／味方（我々）」をくっきりとした二項に区分する戦争において、国家の純血性という虚構への不可能な忠誠心がエスニック集団において試されることになるからである。内部の外部として歴史的に矛盾した扱いを受けてきたエスニック集団は、今度は「アメリカの正義」という虚構を具現するための戦争の前線（フロンティア）部隊として自らが刈り出されていることに気づくことになる。このような状況において、ハイフン付きのアメリカ人に成

しうることは、対抗的にエスニック集団の純血性を主張することではなく、自らの内なる多様性、混交性、夾雑性²³を理解し、真の意味での「正義」の実現を、アメリカ国家に、突きつけていくことであろう。国家という上からの選別・排除と序列化によるナショナル・アイデンティティの定義づけやアメリカニゼーションやウェスタナイゼーションを押し進めるものの力の構造化は、ジェンダー・エスニシティ・階級の複層的差別構造の最底辺を生きることを強られる移民の母と娘による下からの自己定義とは、相入れないギャップを孕んでいる。とすれば、力・富み・資源の再配分を促すオルターナティブな勢力を、下からのマルチチュードの声として再定位していくこそ歴史を修正する方向性ではないか。世界システムは、全ての人に人権と平等を達成する方法とは、逆の論理（レイシズムとセクシズム、あるいは、誰かの平等は、他の誰かの不平等と引き換えに達成される）によって再編、強化されてきたのであるとすれば、キングストンによって提起されている理想化された地球市民というユートピア的造型は、人権が、皮膚の色、性別、帰属場所などによって、非対称に配備されてきた構造を是正し、無尽蔵にあるわけではない地球の限られた資源を均等に分配し直すヴィジョンを提起しているのである。²⁴

*本稿は、2004年9月18日、中京大学において開催された、アメリカ文学会中部支部月例会において、口頭発表した論旨をもとに加筆修正したものである。なお、Maxine Hong Kingstonのテキストからの引用は、基本的に、*The Woman Warrior* (Vintage International, 1975)邦訳、藤本和子、『チャイナタウンの女武者』（晶文社）。*China Men* (Vintage International)邦訳、藤本和子、『アメリカの中国人』（晶文社）による。

<注>

1. Jinqi Ling, "Identity Crisis and Gender Politics," in *An Interethnic Companion to Asian American Literature*, ed. King-Kok Cheung (Cambridge U.P., 1997), pp. 312-337.
2. Sau-Ling Cynthia Wong(ed), *Maxine Hong Kingston's The Woman Warrior: A Casebook* (New York & Oxford: Oxford U. P., 1999), p. 8.
3. マリア・ミース、奥田暁子訳、『国際分業と女性：進行する主婦化』（日本経済評論社）。マリア・ミース、C. V. ヴェールホフ、V. B. トムゼン、古田睦美／善本裕子訳、『世界システムと女性』（藤原書店）。なお、V. スパイク・ピーターソンは、「グローバル・リストラクチャリングにおける貧困は、フェミニズム問題である。世界的に見て、女性は男性よりも所得が少なく（男性の所得の約60%）、所有する財産も少ない（世界の財産の約1%）。しかし女性は自分自身と社会の子供たちに対してより多くの責任を担っているのである（世帯の30%は女性が支えている）」と大まかではあるが、女性と貧困のシステム連関を示す統計的数字を提示している。「グローバリゼーションの文脈におけるアイデンティフィケーションの政治」<『アソシエ』第5巻（2001.1）, p. 63.>

4. 伊豫谷登士翁は、グローバリゼーションとジェンダーの関係を次ぎのように説明した。「フェミニズムは、近代に対するレスポンスとして生じたのであり、その近代とは、同時に西欧中心的植民地主義がシステム化され、徹底化されていった時代へのレスポンスでもある。…むしろ人権レジームが推進したことは、ある意味では近代の徹底化であり、形式的平等が、隠蔽された差別化をシステムやイデオロギーのなかに埋め込む過程でもある。ジェンダーは、近代そのもののなかに内包されているからである。伊豫谷登士翁編、『経済のグローバリゼーションとジェンダー』（明石書店），p. 37.
5. King-Kok Cheung, "Of Men and Men: Reconstructing Chinese American Masculinity," in *Other Sisterhoods: Literary Theory and U. S. Women of Color*, ed. Sandra Kumamoto Stanley (Urbana and Chicago: U. of Illinois Press, 1998)
6. Donald C. Goellnight, "Tang Ao in America: Male Subject Positions in *China men*" in *Critical Essays on Maxine Hong Kingston* (New York: G. K. Hall & Co., 1998), pp. 229-245.
7. Jinqi Ling, "Identity Crisis and Gender Politics," p.313.
8. King-Kok Cheung, "The Woman Warrior versus the Chinaman Pacific: Must a Chinese American Critic Choose between Feminism and Heroism?" in Sau-Ling Cynthia Wong (ed), *Maxine Hong Kingston's The Woman Warrior: A Casebook* (New York & Oxford: Oxford U. P., 1999), pp. 113-133.
9. Frank Chin, et al. *Aiiieeeee!: An Anthology of Asian American Writers* (A Mentor Book, 1974)
10. Judith Butler, *Bodies That Matter* (New York & London: Routledge, 1993), p. 117.
11. Maria Mies, *Patriarchy and Accumulation on a World Scale* (Zed Books Ltd., 1986), 邦訳、奥田睦子、『国際分業と女性—進行する主婦化』（日本経済社）
12. Mohanty /Russo /Torres(eds.), *Third World Women and the Politics of Feminism* (Bloomington & Indianapolis: Indiana U. P., 1991) など多数。堀田碧、「第三世界」女性表象をめぐる—考察—グローバリゼーションとフェミニズムの可能性—『経済のグローバリゼーションとジェンダー』（明石書店）
13. ガヤトリ・スピヴァック、『サバルタンは語るができるか』（みすず書房）
14. Lee Quinby, "The Subject of Memories: The Woman Warrior's Technology of Ideographic Selfhood," in *De/Colonizing the Subject: The Politics of Gender in Women's Autobiography*, Smith and Watson (eds.) (Univ. of Minnesota P., 1992), pp. 297-320. フーコーの分析によれば、家父長制の二つの権力テクノロジーである「婚姻装置」と「性的欲望の装置」とは、結婚のシステム、親族関係の固定と展開のシステム、名と財産を継承するシステムの複合体 'a system of marriage, of fixation and development of kinship ties, of transmission of names and possessions' である。

15. King-Kok Cheung, "Don't Tell' Imposed Silences in *The Color Purple* and *The Woman Warrior*", *PMLA* 103.2 (1998), pp. 162-174.
16. ジョージ・モッセ、『ナショナリズムとセクシュアリティ』（柏書房）, p. 28.
17. 竹村和子、『愛について』（岩波書店）「ジェンダー／性」の制度。セクシュアリティを結婚によって公的に承認されたものとする性の制度でもあり、コインの表（婚姻内に守ることの道徳的リスペクタビリティ）と裏（に排除された婚姻外の性は、異性愛を「自然な愛」としてナチュラルライズされ、ロマン化され、そのようなドメスティックイデオロギーを内面化した女たちによる、女のための感傷小説によって、結婚を最大のハッピーエンディングな結末とするパターンが長く19世紀的主流であった。公母の言説において、性の制度の真実や裏側は、ヴェールの向こう側に隠蔽される傾向にある。ジェンダーに光りを当てると性は消え、性に光りを当てるとジェンダーが消えるというジェンダー／セクシュアリティのパラドクシカルな裏表の関係を示唆している。
18. 『アジア系アメリカ文学—記憶と創造』、アジア系アメリカ文学研究会編（大阪教育図書）エレイン・キム、『アジア系アメリカ文学：作品とその社会的枠組』（世界思想社）中国系移民のバッチェラー・コミュニティの男女比は、1882年に、27/1という最悪のいびつさを形成する。
19. この'ape-figure'を'an attempted rape'として解釈したのは、Sidonie Smith("Filiality and Woman's Autobiographical Storytelling," in *Casebook*, p. 69)である。
20. 藤森かよこ、『ディズニー・アニメーションとフェミニズムの受容／専有—「ムーラン」における女戦士の表象をめぐって』 Joseph R. Allen, "Dressing and Undressing the Chinese Woman Warrior," *positions* 4:2 (Duke U. P., 1996)
21. Patricia P. Chu, *Assimilating Asians: Gendered Strategies of Authorship in Asian America* (Durham and London: Duke U. P., 2000), pp. 52-53.
22. 古矢旬、『アメリカニズム：「普遍国家」のナショナリズム』（東京大学出版会）, 27-28.
23. Lisa Lowe, *Immigrant Acts: On Asian American Cultural Politics* (Durham and London: Duke U. P., 1996)
24. 上野千鶴子、「市民権とジェンダー—公私の領域の解体と再編」『思想：ポスト国家／ポスト家族』 no. 955, (2003.11), pp. 10-34. 21世紀に生きる私たちは、アメリカを普遍国家の物差しとするような人権と平等が、世界規模で、地球規模で、達成されるためには、実は、あと5つか6つの地球が必要であることを知っている。